

国立国会図書館国際子ども図書館シンポジウム
絵本の黄金時代 1920～1930 年代：アメリカとソビエトを中心に

トークセッション

平成 22 年 11 月 27 日

コーディネーター：島 多代

パネラー：レナード・マーカス、

ヴェレナ・ラシュマン

はじめに

島：今、ラシュマンさんとマーカスさんにそれぞれの国の状況を伺いました。その頃の日本の『コドモノクニ』や『赤い鳥』との関連の話をするとならぐ深くなってしまうので、ここでは何も触れることができません。ただ、アメリカとソビエトを中心にした今回の「絵本の黄金時代」展を御覧になった方たちから、日本とのつながりが見えなかったという少しがっかりした感想も聞きました。1920 年代～30 年代の日本との関わりは、複雑に重層的にありますので、それが今生きている私たちに伝わるようにする仕事がかこれからまだまだ私たちに残されているような気がします。この歴史の話は、古い昔の話に戻っているのではなくて、実際には一番大切な今の話であるということを証明する形で今後続けていきたいと思っています。

今日、ラシュマンさんとマーカスさんとは、子どもの本とは一体何かという話をしたいと思っています。子どもの本とは何かとか、子どもに何を伝えるのかとか、物語の存在理由は何かというのはいろいろあると思います。全ての子どもの本ではありませんが、素晴らしい作品は時代を超えてしまう。そして大きな時

代の変わり目には子どもへの視点が生まれる。恐らく時代が混乱したときに、これから生きる子どもたちはどうなるのだろうと大人たちは思う。今の日本もそういう時期に達しているような気がします。

非常に大きな話になりますが、1900 年代のソ連とアメリカで大人たちは一体何を考えて子どもの本を作ったのかを伺いたと思います。マーカスさん、1920～1930 年代の第一次世界大戦後のアメリカは、恐らく最初に絵本の中にアメリカ的なものを出してきたのではないかと思います。その理由、そしてアメリカである輝かしい、たくさんの作品が生まれたきっかけになる動き、それは出版界に子どもの部門が出来たということはあると思いますが、その辺りの事情を分かりやすく説明していただけませんか。

第一次世界大戦後のアメリカの状況

マーカス：当時の絵本の出版社の目的は、より複雑な産業化、都市化された世界の中で子どもや若い人に自分たちの場所を与え、この新しい世界の中で迷わないようにすることだったと思います。その当時の絵本を代表するものの一つとして、*Mike Mulligan and his*

steam shovel (マイク・マリガンとスチーム・ショベル) があると思います。これは機械に焦点を当てたもので、機械を人間のようにキャラクター化します。それからタグボートの話、*Little Toot* (ちびっこタグボート) もそうです。こうしたストーリーの中では、小さな機械が状況に何かを付加し、改善することができる。大きな機械ができないことが小さな機械のできるのです。子どもの観点から見ると、子どもだって何か貢献することができる、子どもは大人に支配されるだけではない、という意味があります。子どもでも世界に何か提供することができるということが一つの要素だと思います。

出版社と図書館は絵本をなるべく美しくすることに熱心でした。最高の画家を探すだけではなくて紙の質、装丁、タイポグラフィや製本にも目を向けました。絵本が子どもたちの最初に経験する芸術と文学であることも考慮されました。文化への導入です。私たちの人生の生活の中の、より優れた部分に触れる機会です。例えば漫画本のような大衆的な文化がやって来たとき、これは比較的安価な紙に印刷され、早く出版され、必ずしも絵の質は高くありませんでした。絵本を文化的な象徴にしたいと思っていた人たちは、漫画本が絵本と同等の価値を持つと認めることはできませんでした。それが、子どもたちにとってどういう本が優れているのかという議論の発端になりました。

もう少し、子どもの本とは何かという広範囲で考えますと、それは「希望の文学」だと私は思います。人生の多くの要素を示し、必ず最後に希望を与えます。子どもたちはまだ人生を歩み始めたばかりです。そこに将来が

あるから、未来があるから、彼らが直面する問題は価値のある問題なのだという確信を与えます。

革命後のソビエトの状況

島：ヴェレナさん、レニングラードで起こったロシア革命後、編集者、作家、画家たちの動きの中で彼らが表現したかったものは何だったのでしょうか。アバンギャルドの芸術家たちがモダニズムという全体の大きな動きの中で、それを子どもたちに向けて表現するチャンスを得たこともあるかもしれませんが、その人たちが全体として子どもたちに持っていた感覚は、どのようなものだったのでしょうか。ソ連は大きなユーラシア大陸の各地を結んだ民族の集合のようなものだったと思います。そうした大きな新しい社会の統合に向けて、一人一人の子どもたちに何を語ろうとしたかを、芸術家たち一人一人が本当に自ら持っていたのでしょうか。それとも、チュコフスキー (Kornei Chukovskii) やマルシャーク (Samuil Marshak)、レーベジェフ (Vladimir Lebedev) のような編集の責任者たちの一つの大きな力がそれぞれの画家たちに働いたのでしょうか。今の画家や文学者たちが絵本を作るような形で出版が行なわれるのは違う形の時代に、どのようにしてあれだけ素晴らしい絵本が生まれていったのか。その中心となる人たちの影響力が非常に大きかったのかどうか。その辺りを少し伺いたいと思います。

ラシュマン：最後の文章がちょっと理解できなかったのですが、もう一度質問を繰り返していただけますか。

島：ロシア、ソビエトの作家、画家、編集者たちが当時のソ連の新しい総合的な社会の中で子どもたちに実際に伝えようとしたことを、一人一人の作家たちがイニシアチブを取って考えていたのか。それとも全体的に編集方針が決まっていたのかを教えてくださいたいと思います。

ラシュマン：児童文学の様々なねらいは、個人のタスクと社会におけるタスクを差別化することだと思います。児童文学作家のレーベジェフは、新しい社会の言語となるような子ども向けの言語を作ろうとしました。ソ連での社会と生活の変化を表す新しい言葉、あるいは表現の仕方と同時に、子どもたちの言葉も作ろうとしました。そしてその言葉を使って子どもたちが自己表現できるようにしたかったのです。その言葉の子どもへの使い方というのが、絵本や児童書の中の言葉や絵だったのです。そしてそれを読んで子どもたちがその言葉を習得し、自分の希望を表現できると同時に大人のことを理解できるようにしたかったのです。ですから、児童書は大人と子どもの橋渡しの役割を果たしました。そして、モスクワの出版社は、子どもの本は国が必要としていることを伝え、国民としての責務を伝えるべきだと考えていました。したがって、ソ連では絵本や児童書の役割は一つだけではありませんでした。これで御質問への答えになりましたか。

子どもの本は希望の本

島：子どもの本とは何かというのは本当にトータルに常に我々が考えなければならないこ

とだと思います。それは、先ほどマーカスさんがおっしゃったように「希望の文学」であると思います。子どもの本の中で、子どもたちに「もうこの世の中は生きている意味がない」と言う文学はありません。この世の中を生きなさい、生きる方法がある、どこかにあなたの場所がある、ということを実際の作家は伝えていったのだらうと思います。そして芸術の中で、子どもの本は一つの特徴的なジャンルなのかなと思います。他の大人たちの芸術が全て希望につながるかどうかというのは断言できません。子どもに対する芸術の形というのは、今までに少なくとも私たちが知る限りでは、やはり希望を持ったもののような気がします。

私がその中で一番気になっているのが、ソビエトで 1927 年に出たマヤコフスキー (Vladimir Maiakovskii) の ЭТА КНИЖЕЧКА МОЯ ПРО МОРЯ И ПРО МАЯК (海と灯台についての私の本) という本です。その 3、4 年後にマヤコフスキーは自殺しました。彼自身は自分の人生に恐らく何らかの絶望を抱いていた。でもその絶望の手前で、最後に子どもたちに「暗闇の海の船を照らす灯台のようになってください」と言葉を述べているのです。自分にはもう希望が見えなくても君たちは希望を照らす人になれ、という叫びが聞こえるような気がします。子どもの本は、子どもたちには「人間は生きているよ」と言い続けるのではないかと思います。そう思うと、子どもの本というのはやはり希望の本だという気が確かにいたします。

社会の変化と子どもの本

島：いろいろな国の状況があつて、それぞれの国で特殊な子どもの本の発展の歴史を持つと思います。時代も社会も変遷する中で、子どもたちにとって変わらないものは何かと大人たちが言うとき、例えば先ほどマーカスさんのお話のスライドに出てきたワンダ・ガアグ (Wanda Gág) の *Millions of cats* (100 まんびきのねこ) について伺いたいと思います。これは日本でいまだに皆が一生懸命読んでいます。これはアメリカではまだ売れていますか。読まれていますか。

マーカス：販売されていて読むことはできませんが、余り話題に上りません。よく分からないのですが、余りにも新しい子どもの本が出版されているので。図書館におけるお話の時間などでは読まれていると思うのです。でも、子どもが成長する過程で一度は経験する物語だとは思いますが。

島：この本が出たのは第一次世界大戦と第二次世界大戦の間でした。100万匹の猫がいて、自分の場所を作ろうと思って戦いました。弱いから戦わなかった一番弱い猫が最後に生き残ったという、こういう話が出たのです。どんな子どもたちにもあなたの場所があるよと言っているのだと思います。読者が弱い子どもか強い子どもか、できる子どもかできない子どもかが分からないときに、全ての子どもに向けて作品や詩を書くのは、とても高度な創作活動のような気がします。それについてどう思われますか。

マーカス：『100 まんびきのねこ』は、非常に

よく語られたストーリーのある本の一例です。この本に描かれている言葉はリズムがありますし、非常に音楽のような流れがあります。図書館のお話の時間にも子どもが好むであろうということでもよく使われる本です。言葉の音にひかれてずっと聞いていくような構成です。非常に聴衆を魅了する本だと思います。このような特徴が1920~1930年代のアメリカの絵本に取り入れられた部分だと思います。

子どもの本に見える遊び心

島：例えばソビエトの絵本で当時一番みんなの注目を引いたレーベジェフのЦирк (サーカス) のような本は、ロシア語が分からなくても、「絵本ギャラリー」に入れたロシア語の朗読を聞くと、大変リズムカルな音と絵の関係が顕著に出ているような気がします。恐らくレーベジェフが最初に絵を描き、それにマルシャークが言葉を付けたのでしょう。それはどのように評価されていますか。

ラシュマン：マルシャークは子どもたちがいるべき場所を示すというよりは子どもたちに言葉を与えることをしていたと思います。しゃべることを教え、それから空想や想像力をかき立てる。そうすることにより、子どもたちは自分たちの場所を見付けることができるのだと思います。そして大人になったときに自分の場所を見付ける。『サーカス』は最も遊び心に富む、言葉の遊びがたくさんある本だと思います。マルシャークは非常に天才的なことをしたと思います。Багаж (荷物) という本では、人生の道を探すことを教えています。

マーカス：アメリカでは、マルシャークが一番よく似た作家はマーガレット・ワイズ・ブラウン (Margaret Wise Brown) です。彼女は日本でも有名だと思います。 *Goodnight moon* (おやすみなさいおつきさま) で有名な作家です。彼女が 1939 年に書いた本で、L. ワイズガード (Leonard Weisgard) が挿絵を描いた *Noisy book* (きこえるきこえる) の中には、町の音、例えば横を過ぎ去る車の音やドアの前のガラスがパタパタする音などが描かれ、それらのものをまねするように子どもたちを誘います。だんだん音がうるさくなって、にぎやかに騒がしくなります。実はこれが目的で、彼女がここで実現したかったのは、子どもが作家と画家と一緒に本を作り出すことでした。非常に遊び心のある形で、子どもは大人と同じレベルなのだと伝えています。読むというのは静かに座ってお話を聞くことではなく、もっと積極的に、活動的に、創造的に参加することを意味しているのだと彼女は訴えたかったのだと思います。

島：多くのそういう遊びがソ連の本でも目に見えます。タイポグラフィーにも見えるし、恐らく音だともっと分かると思います。

多民族国家と日本

島：そういうものをものすごい数、全国に郵送したのですよね。当時、ソ連各地の読者のもとにあれが届けられたと思います。各地にロシア語が話せる人だけがいたわけではないから、ロシア語だけではないわけでしょう。その場合には各地の翻訳本が出ていたのでしょうか。

ラシュマン：はい、翻訳はされていましたが、正確に何語にというのは私にも分かりません。確か少数民族の言葉、例えばタタール語とかウクライナ語への翻訳を見たような気がします。ただ、こうした本を探すのは非常に難しく、今まで見たことはありません。

島：1920 年代には世界がいろいろなところで大きな変動があり、例えばアメリカには各地の移民たちが非常に押し寄せ、ソ連はたくさんの民族を含む大きな国に統合されたということで、対象が様々な民族になりました。

日本はそのような経験がない、世界でも珍しい地域だと思います。日本は島国です。本当に韓国や中国と近いのですが、そこに海があることで、ある意味では非常に孤立した地域です。それで外国のものをたくさん受け入れてきました。でも一つの民族の中で外国のものを本だけで受け入れるのはとても難しいと思います。日本では、本はすごく受容されますが、実際に多民族社会の状況を認識することがとても難しい。今、日本にはたくさんの外国からの子どもたちも入ってきています。その子どもたちに日本語の習得をさせながら日本の絵本を読ませる中で、テーマや表現とかをどう伝えるのか、今後の課題となっていくと思います。絵本や本は重大な役割を持たなければならないと思います。

たくさんの民族が一緒に住むことの大変さを世界が体験して、随分後に日本はもちろん敗戦などを体験したものの、一緒に住んでいる人たちの大半が一つの民族なので、今後、絵本の世界や物語の世界で助けられながら日本の子どもたちが外に出て、たくさんの外国の子どもたちが日本に入るといった物理的なこ

となしには、日本が本当の意味で世界の一部になることが難しいかなという感覚を私は持っています。

日本の印象とジャポニズム

島：マーカスさんは日本の絵本や日本の文学を外国から御覧になって、日本人を含めて日本はどんな国だと思われませんか。

マーカス：一つ言えるのは、私が尊敬している絵本作家の一人は安野光雅だということです。10年ほど前、本についてちょうど彼をインタビューする機会があり、幸いにも彼にお会いすることができました。私は彼の深い洞察力、特に子どもたちの学習方法についての洞察力に大変感銘を受けました。彼の本の目的は、「教えることなく教える」ということだと思います。子どもが本を学校のように感じるのではなく、でも、本の中で起きていることによって何かを学んでほしいと彼は言っていました。彼の絵本の多くには文字がありませんでした。絵だけでそういうことを教えるということに私は非常に感心しました。小さな子どもがストーリーやメッセージを絵本から学び、もう少し大きな子どもはそこからもう少し別のものを得ることができるということ、これは非常に珍しい類まれな功績だと思います。

残念ながら米国で出版されている日本の絵本は余りありません。ですから私の印象は非常に限定的です。特に米国にあるものだけの印象ですが、絵本の美しさ、水準の高さは素晴らしいと思います。赤羽末吉や手島圭三郎の作品も見たことがあります。日本の絵本を見た私の印象は、今申し上げたようなもの

です。

日本についてどうかということについてはどうお答えしたら分かりません。日本について学ぶことのできるこの滞在期間を非常に楽しんでいるとしか言えないかもしれません。ちょうど空港から電車に乗ってきたとき、車内の放送が韓国語、中国語、英語、日本語と複数の言語でありましたので、日本の文化も多文化に対して接していかなければいけないという認識を持っているのだなと私は思いました。あくまでも旅行者の考えですけれども。

島：ありがとうございます。安野光雅という人は外国では日本人とは思われていないのですよ。アンノーというイタリア人かな。コロンビアのIBBY世界大会（2000年）のときに、コロンビアのIBBYの人たちが安野さんの部屋を作ると言うので、安野さんに「コロンビアに行ってください」と私が言ったら、安野さんは私が脅迫したと取り違えて、でも脅迫されて行ってくださったのです。安野さんの絵はもう本当に世界各地に渡っているのですよね。たくさんの方が日本人だと思っていない。その辺りに安野さんの不思議さがあります。非常に日本的な人ですが、何かやはりボーダーを越えています。あれが本当の芸術家かもしれませんね。どこにいても通用する一つの芸術家のあり方だと思います。ラシュマンさんは日本のもの、日本の絵本などに多少関心がありますか。

ラシュマン：もちろんあります。私たちは日本の絵本の展示会も行いました。沼部信一さんから、1920年代のソ連の本の何冊かは即日本語に翻訳されていたと伺いました。ですか

ら、日本とソ連の芸術家の関係は非常に近かったと言えると思います。ビアンキの *Snežnaja kniga* (雪の本) の絵を覚えていらっしゃいますか。ウサギとキツネが雪の中にいる絵です。これははっきりと日本の影響を受けた絵だと思います。ですから、日本とソ連の芸術家の交流はあったと思います。しかしながら戦争によって断ち切られてしまったと思います。

私は、日本文化は世界中あちこちに見えると思います。私たちの子どもは日本の漫画を日本語で読むことを学んでいます。でも開く方向が違うので、逆に本を読んでしまいます。日本の映画も西ヨーロッパに進出していますし、西ヨーロッパの芸術への日本の影響は、思っているよりかなり大きいと私は考えます。もちろん私自身も日本の絵本、日本の映画に関心があります。でも、私自身は漫画を読めません。日本語が読めないし、漫画のコンセプト自体も理解できないので、私が理解できない特別な読み物だと思っています。

多分、日本の浮世絵がパリに 1850 年代に渡ったと思います。19 世紀後半のイラストレーターで近代の絵本を発展させたランドルフ・コルデコットの作品と日本の木版の浮世絵を見ると、かなりそこから学んだのだろうということが言えます。ですから、日本の芸術が西洋の絵本の背景にあるのは真実だと私は考えます。

島：「絵本ギャラリー」の中に「江戸絵本とジャポニズム」というジャンルを作りました。確かに浮世絵はユージン・シュティルの元となりました。あのときに写真機の発明があって、大風景画を描いていた人、大肖像画を描

いていた人たちが、自分たちの仕事は無くなったと思った。写真を元絵にして微細に描いていたたくさんの絵描きたちが本当に今後どうするのかと思ったときに、万博の包み紙のような形で渡って行った江戸の浮世絵に非常に影響を受けました。芸術家はすごいと思うのは、そうやって描いていた人たちが、例えば一本の草、葉っぱ、花に全てをかけた背景にある哲学のようなものを感受する力があつた。芸術家たちがそういう形で物を捉えようとした。例えば先ほどマークスさんの写真の中にウィリアム・ニコルソン (William Nicholson) の絵本がありましたね。

マークス： *The square book of animals* (まっ四角な動物絵本) で、「絵本の黄金時代」展に出ています。彼もイメージを非常にシンプルにした作家です。

島：家畜だった羊やロバを一つの絵の中にぼーんと描いて通用するとは普通は思わないですよ。遠近法で風景画とか宇宙の全てを一枚の絵の中に描き込んでいった西洋の画家たちが一つの身近な動物をぼーんと置いて、それを芸術だと言うきっかけになったのが、恐らく浮世絵だと思います。

絵本の文化をどのように子どもに伝えるか

島：浮世絵に対する感受性が世界の画家たちにあつたということは、芸術家というのは美しいものの表現の仕方を共有できる特殊な人たちなのだと思います。だから、芸術の世界では文化の違いが無い。その芸術の手段を持つのが絵本だとすると、絵本は絵と文で分け

合って物を言えるとすれば、逆に文学を越えた一般的な通用性により、普遍的な子どもたちへのアプローチも持ちうる。もう一つは、先ほど二人ともおっしゃったけれども、感覚的な言葉の音や表現が理屈とか物語の話ではなくて、絵と共にその絵本の中で表現される、絵本というのは不思議な空間を作っているメディアかもしれない。その辺りで将来に向けて何か考えられればと思います。

私も実はヴェレナさんがおっしゃったように漫画が読めないのです。きっと慣れですよ。小さいときは読んでいたのですよ。小さいときに読んでいた漫画と今の漫画はちょっと違うのです。だから昔はすごい勢いで漫画を読んでいたのですが、今は読めない。これは何だろうなと思います。人間には常に限界があって、それに苦しめられて私たちは生きています。

ラシュマン：漫画本に関して私と非常に同じように考えてくれる人がいてよかったです。というのは、漫画が読めないと私はいつも一人だけ年寄りだと感じてしまうからです。

マーカス：私は、絵本の重要な特徴は、様々な人間の性格を表していることだと思います。ある子どもは本を読んでこの世界のことを知りたいと思うかもしれない。でも子どもによっては、ファンタジーだけを読みたいかもしれない。あるいは自分の質問に答えてくれる本を読みたいと思うかもしれない。絵本はそういうものに全て答えています。人によってはそれがもしかしたら漫画かもしれない。漫画を好む人もいます。人間だから好みがあるのです。一人一人好み異なるので、どのよ

うなお話をもとに自分たちがどんな人間なのかを表現していくかということも異なります。

私の息子は非常に幼いとき、マーガレット・ワイズ・ブラウンの『おやすみなさいおつきさま』を気に入りませんでした。小さな子どもにはよく読まれている本です。私は『おやすみなさいおつきさま』の作者の伝記を書くのに10年研究していたのです。でも、息子は1度もちゃんと聞いてくれませんでした。多分アメリカ中でこのお話を聞かなかった子は彼だけだと思います。それは私にとってよい教訓でした。どんなに有名な絵本でも、全ての子どもに合う本は無いと学んだからです。

島：まことにそうですね。だから、一人一人の人間がどれだけ違うか、でもどれだけ違っても一人一人の価値は同じだということを、どうやって皆が分かるか。これは本当に我々人類の最終目標です。子どもが人生を生きるために有効なもの、例えば希望や夢、祈り、愛、目的、自分を克己することやその自分を意識すること、世界をどう見るかということ、そのようなことが自分にはできるのだという身近な体験の手がかりとして絵本があるとなれば、喜ばしいことだと思います。子どもが小さいうちにそういうを感じる機会を得るとしたら、絵本が一番手近なものなので。

ただ、今は本を売らなければならないのでとても難しいと思います。売るために一生懸命本を印刷し断裁して、そして何が残るかといったときに、こういう消費社会において、よい本にめぐり合わない人たちがたくさん出てきているという感じもします。そこで図書館員たちの役割が出てくると思います。編集者の場合、出版社は企業ですから、昔の出版

社や編集者とは違う状況にあると思います。
私たちが持っていた本の文化や絵本の文化を、
この消費社会においてどうやってなるべく純

粋な形で有効な形で保っていけるかというこ
とは、誰にとっても大きなチャレンジだと考
えます。